

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

僕の安牌・・・「鉢伏山」

北信越の先生方との楽しい山スキーをした翌日の6日。池工山岳部の生徒と一緒に鉢伏山に登ってきた。・・・「アンパイ」、麻雀で確実に通っている牌、絶対に振り込まない「安全牌」をそう呼ぶ。生徒と厳冬期2月の山に行くにあたって、考えたのはこの「アンパイ」ということだった。引率は1人、生徒にとって「雪のある冬山」は初体験。となると僕が熟知していて、万が一のときにも対応が取りやすい山でなければならない。

最初は一泊してゆっくり上高地に行こうと考えていた。ところが生徒と私の都合がうまくあわず日程を1日しかとれない上に、愛すべき生徒たちは「久しぶりに『山』に登りたい!」という。そんな嬉しい生徒の声を聞いて、上述のことを考えた次第。そんなわけで鉢伏山へ行くことを決め、コースは、1月にも登った千石からのルートを往復することにした。

8:45登山口発、早速尾根上に出る。さすがに2月、風は冷たい。次第に雪が増えてくると、雪の中を歩いた経験がない一人の生徒が妙にくたびれた様子。見ていると、歩くときの体重移動がうまく行えていない。「一步にしっかり乗り、しかる後次の一步を出す」と、ちょっとコツを教えてやると歩きが変わり、「先生、楽になりました」と一言。前回同様至る所、縦横無尽に鹿の足跡と糞がある。「ピューッル」甲高い声で、危険を察知した鹿が啼くのがあちらこちらで聞こえる。

11時20分以前鉢伏山(1836m)に到着。やや風強し。景色はまあまあ。ここで輪かんを装着させた。「歩くときに自分で自分を踏むな、花魁歩きが極意」とアドバイス。初めての道具に興味津々の生徒たち。しかし、雪は、一月前に登った時よりむしろ減っており、輪かんなしでも問題ない。日本海側の大雪とは裏腹に松本平は本当に少雪の冬、ここ鉢伏もここ一ヶ月、あまり雪が降った形跡がない。12時25分、三角点に到着。三角点と頂上を示す道標に、「頂上だ!腹が減った」という生徒をもう一頑張りさせて、私のお気に入りの場所である頂上台地の南東の最高点まで引っ張る。ここからは、樹林帯の中を行くのでそうはいっても結構もぐる。岡谷市最高点の標識の立つところまでたどり着き、「ついたぞ!」と後ろを振り返ると一番後ろを歩いていたN君がばたつと



倒れた。自分で自分の「わっぱ」を踏んでそのまま倒れ込んだらしい。N君に駆け寄り、そのまま雪の中に倒れたN君と戯れるY君。山を、雪を、冬を、心から楽しんでいる。

天気はいい。ここは風もない。しばらく雪と戯れた生徒たちは満足したのか、早速持ち上げたラーメンを作りはじめた。ネギ、チャーシュー、煮卵、メンマ、コーン・・・たかがインスタントラーメンといえど、トッピング材料がこれだけ充実していると美味である。真冬のおよそ2000mの山頂でのラーメン作り。諏訪湖を眼下に、美ヶ原、北アルプスをおかずに食べるラーメンは、なかなか乙なものであった。

景色を堪能した後は、往路を下り、無事下山したのは15時。お疲れ様でした。

「岳人」誌・・・「高校山岳部の仲間たち」

今発売中の「岳人」3月号で、池工の山岳部を取り上げていただいた。題して「長野県池田工業高校山岳部 新しいスタート、山岳部に活気を取り戻す」

「高校山岳部の仲間たち」という見開き2ページのこの企画は、2008年3月に始まった連載企画で、今回で37回目である。第1回目にとりあげていただいたのは、前任校木曾高校定時制アウトドア部であった。以来、毎号「岳人」が届くたびに、全国のあちこちの高校でがんばっている山岳部の生徒たちの生の声や、顧問の先生方の生徒への温かいメッセージに勇気づけられたり励まされたりしてきた。たまたま学校が替わったという理由で、同じ人間が顧問をしている学校を再び取り上げていただくことになった。実は紹介しようと思って、し損なっていたのだが、前号(2月号)には「新潟中央高校」(11月号)、その3号前には「新発田高校」と北信越のなじみの高校が紙面を飾っていた。すでにバックナンバーとなっているが、部員29人を擁し、インターハイ常連で今年度北信越大会にも出場して元気いっぱい黒姫山上空の雨雲を吹き飛ばしてくれた「新潟中央高校」の活動や、少人数ながらも安全第一を心がけたスロー登山で、四季折々の山を味わいつつ楽しんでいるという「新発田高校」など、顧問の先生の顔を思い浮かべながら、誌面に現れない部分を想像しながら読んだ。

こうしてこの連載は、インターハイ常連校も、細々ながら存続している学校も、同列で取り上げてくれ、活動している生徒たちの生の声が活字となっている。今月号で池工の部員たちも素直な感性で山への魅力を語ってくれている。生徒に教えられながら、助けられながら楽しく顧問をしている私である。もしよろしかったら店頭でお手にとってご覧ください。なお、本文は東京新聞出版局岳人編集部のご厚意で池田工業高校HPにアップしてあります。下記のURL、<http://www.nagano-c.ed.jp/ikekou/>から岳人の表紙をクリックしていただくか「クラブ活動」→「山岳部」と入っていただければ、記事の全文をお読みいただけます。

編集子のひとごと

前号で北川さんからいただいた「金山沢」での山スキーの報告をした。大変に魅力的な中身であった。しかし、この時期の金山沢はリスクも大きいことを忘れてはならない。読者のお一人からも、「この時期の金山沢は考えられない」という提言もいただいた。雪の状況、沢の様子等を見極めて十分に安全が確認できない限り、この時期の入山については慎重であるべきだということを改めて述べておきたい・・・「春隣」、そんなことばが実感として感じられるようになってきた。くれぐれも安全第一で。(大西 記)